

「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー (1)

—日本語・日本文化の記憶に関する報告—

奥田浩司

1

「満州国」⁽¹⁾ 及び旧植民地における日本語・日本文化との接触の状況について考察することを目的として、高齢日本語話者へのインタビューを行っている。その内、本稿では、満州国で生活していた朝鮮人の日本語・日本文化との接触にかかわるインタビューについて報告を行う。

なおインタビューを通して収集した資料については、より多角的な視点から論じる必要があると考えられるため、本稿では問題意識の整理及びインタビューの一部の記述に止める。インタビューの全文、歴史的検証については稿を改めて論じることとする。

ここで予めインタビューを行う過程で明らかとなった問題点について整理しておく。インタビューに着手した初期の段階において、日本語・日本文化がどのように記憶されているのか、という〈記憶〉の問題があることに気づいた。具体的に言えば、インタビューを行った高齢日本語話者は、幼少期に日本語・日本文化に接触しているが、日本の統治から解放された後にも、日本語・日本文化との接触があった。その点を考慮すれば、現在、高齢に達している日本語話者の、満州国における日本語・日本文化との接触の〈記憶〉に、その後の人生が干渉していることは十分に考えられるであろう。

このような想定の下、当初は満州国における記憶に限定していた研究の方向性を修正し、インフォーマントの幼少期から現在にいたるまでの日本語・日本文化との接触について考察していくこととした。

今回、インタビューに応じていただいたインフォーマントは、幼少時に植民地朝鮮から満州国に移住して小学校時代を過ごし、満州国崩壊後の中国において高等教育を受けた中国朝鮮族の朝鮮人知識人である。インフォーマントは日本語に堪能であり、インタビューのほとんどは日本語で行われた。インタビューを行ったのは、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉であり、2017年8月と2018年12月の2回に分けて行われた。

繰り返しになるが、インフォーマントと日本語・日本文化との接触は、植民地朝鮮での小学校教育に始まり、満州国に移住した後も小学校教育において継続された。しかし満州国崩壊を境にして、インフォーマントと日本語・日本文化との

接触は一度失われる。その後かなりの期間を経た後に、インフォーマントは中国において再び日本語・日本文化と関わりを持ち、高等教育機関において日本語・日本文化の教育に携わることになる。インフォーマントへのインタビューは日本語で行われたが、日本語能力の多くは、満州国崩壊後に自力によって培われたものであると推測される。

またインフォーマントの幼少時における日本語・日本文化の記憶には、細部について言及するなど鮮明な点が多々あった。この事は、インフォーマントの記憶能力に関わるものであると考えることもできるが、その一方で、継続的な日本語・日本文化との接触が幼少期の記憶と何らかの関わりを持っていることは否定できないのではないだろうか。

上記の点を考慮し、本研究では現在にいたるまでのインフォーマントの日本語・日本文化との接触について記述し、その中に満州国における記憶を含めていくこととする。インフォーマントの記憶が後年の日本語学習と何らかの関係性を有している可能性がある以上、満州国における日本語・日本文化との接触のみに限定することなく、インフォーマントの人生全体の中に満州国の記憶を位置づけていくことが必要であると考えたからである。

本稿を書くにあたって、新保敦子・花井みわ「満州国における朝鮮人女子青年教育—ライフヒストリーの分析から—」⁽²⁾、朴仁哲「朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究—移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに—」⁽³⁾、坂部晶子「満州劳工」の記憶—黒竜江省東寧県の聞き取り実践」⁽⁴⁾、金美花『中国東北農村社会と朝鮮人の教育—吉林省延吉県楊城村の事例を中心として（1930—49年）』⁽⁵⁾などを参照した。

2

前節では、インフォーマントの記憶との関わりから、本研究の問題点について述べた。本節では、インタビューを行う側（インタビュアー）の問題点について整理しておきたい。

本研究では、予め質問項目を準備し、それに沿ってインタビューを進めることを考えていた。しかし実際には、インフォーマントとのやりとりの中でインタビューの話題は様々な事柄に転じ、語られた内容は多岐に渡ることになった。インタビューは、ほぼ1時間半にわたって行われた。

インフォーマントとの対話において改めて気づかされたのは、インタビューする側が「日本人」であることの問題である。朝鮮人の高齢日本語話者にとって、インタビュアーは、満州国を建国した言わば“日本人の末裔”である。日本語高齢話者は、一人の朝鮮人として満州国崩壊後の延辺で生活をしてきたのであり、満州国について否定的な歴史観を抱いてきたことは自明なことである。そのよう

な認識をもつ朝鮮人知識人が、日本人に満州国の経験を語ることに戸惑いのあることは容易に推測されるであろう。

本研究におけるインタビューの目的は、満州国における日本語・日本文化との接触に関することに主眼があり、過去の歴史的事実を掘り下げる意図は持ち合わせていなかった。しかしインフォーマントとの対話を通して、インタビュアーは否応なく「日本人」であることを自覚し、同時にインタビューは予定されていた質問内容から大きく逸脱していくことになった。

このようなインタビュアーの経験については、ライフストーリー研究に述べられるところの「対話的構築主義アプローチ」が参考になるのではないだろうか。桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』⁽⁶⁾では、「対話構築主義アプローチ」について次のように述べている。

語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、十分に聴衆（インタビュアー、世間など）を意識している。たんなる情報提供者インフォーマントではないのである。その意味で、語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない。とりわけ、語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べることに以上（いま・ここ）を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きていることである、という視点は、対話的構築主義アプローチにおいては基本的なことである。インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場なのである。⁽⁷⁾

本研究はライフストーリー研究を前提としたものではないため、インタビューをするにあたって、「対話的構築主義アプローチ」意識してはなかった。しかしインタビューが終わり、資料を整理して検討する段階で、本研究のインタビュー方法が「対話構築主義アプローチ」に近接していることが明らかとなった。インフォーマントの物語る記憶は、インタビュアーとの「対話」を通して、「構築」されている点に注意を払う必要があるであろう。

3

本節ではインタビューの一部について記述する。記述の内容は、日本の敗戦前のものである。

——お生まれはいつでしょうか。

1932年生まれ。私は、朝鮮生まれです。1945年8月15日のときに、私は小学校6年生でした中国では解放前と言いますが、小学校3年生のときに、(満州の)

日本語学校に来ました。延辺の、傑満洞小学校に入学し、5年生まで通いました。6年生のときに、引越して春陽というところに行きました。(満州)は、執筆者が補足した)

—日本語をどのようにして学びましたか。

小学校に入学したら、日本語を使わなければならなかった。

—授業は、日本語ですか。

全部、日本語です。

—先生は、日本人ですか。

校長先生は日本人で、他の先生は、朝鮮人だったと思います。朝鮮では、校長先生は、日本人でなければならなかった。中国に来ると、校長先生も朝鮮人だった。

—教科書は、どのようなものを使っていたのでしょうか。

よく覚えていませんが、日本語の教科書でした。どうしてか分かりませんが、歌はよく覚えています。

—どのような歌を覚えていますか？

夕焼け小焼け、それから軍歌ですね。勝ってくるぞと勇ましく……。どうしてか分かりませんが、歌が遺っています。あの顔で、あの声で……。

—朝鮮の歌は覚えていますか？

覚えていません。覚えているのは、全部、日本語の歌です。もしもし亀よ、亀さんよ、桃太郎さん、……。全部覚えています。小学校の時に、習いました。幼いときには、意味がよくわかりませんでした。

—小学生のときに、映画を見ましたか？

見てません。

—小学生のとき、日本語・日本文化との接触はありましたか？

まったくありません。貧しい、山奥の農村でしたから。警察は、日本人でした。今、記憶に残っているのは、歌だけです。

—小学校の時に読むことができるものは？

教科書だけ。

——教科書は買ったのですか？

お金を出して買いました。何回かに分けてお金を出しました。

——授業料はどうでしたか？

月謝金がありました。

——どうやって学校に通ったのですか？

歩いて通いました。五里くらいでした。裸足でした。

——小学校に図書室はありましたか？

全然無いです。

——村の中では？

全部、朝鮮語です。村の生活では、歌は、朝鮮語です。

——日本が戦争に負けたあと日本語は使いましたか？

まったく使いません。解放後は、朝鮮語と中国語だけです。

以上は、満州国における小学校時代の記憶の一部である。インタビューでは、その他、植民地朝鮮から満州国に渡る際の出来事、「土匪」の問題、満州国崩壊後における日本語・日本文化との接触などが語られていた。この点については、別稿を期したい。

これまで数人のインフォーマントと接してきたが、75年近い過去のことを記憶している点では傑出していた。さらに重要なことは、インタビューの記述の中に「夕焼け小焼け、それから軍歌」と言及があるように、インフォーマントが多くの唱歌や軍歌を記憶していたことである。実際に、インフォーマントは、インタビューの前で何曲が歌を披露した。インフォーマント自身は、なぜ歌を記憶しているのかと言う点については分からないと、何度も自問していた。このことは、帝国主義と身体に刻み込まれた韻律の関係性が重要な課題であることを示唆しており、新たな課題として認識された。

またインタビューを終えて整理する段階で気づいたことではあるが、結果的に本稿の問題意識の一端は、新保敦子・花井みわ「満州国における朝鮮人女子青年教育—ライフヒストリーの分析から—」⁽⁸⁾に近接することになった。新保敦子・花井みわ論文では、以下のように課題が設定されている。

本論では、日本の軍事支配下の「満州国」における、朝鮮人の女子の中等教育の実態を明らかにし、彼女達はいかなる教育を受けたのか、そこで学んだことは何であったのかを検討していくものとする。あわせて満州国で近代教育を受けた朝鮮人女子青年たちが、戦後、どのように大日本帝国による教育の資源を利用しながら共産党政権下で幹部や知識人、職業女性として活躍し、社会的移動やキャリア形成を果たしたかを明らかにすることを課題として設定していく。

本稿で記述することはできなかったが、インタビューの内容には、インフォーマントが満州国において受けた教育を「資源」として、解放後の中国において「キャリア形成」していく過程が含まれている。

最後にまとめとして、本研究において、以下の五つの点が課題となったことを報告する。一つめは、インフォーマントには日本語・日本文化がどのように記憶されているのかという〈記憶〉の問題があること。二つめは、その〈記憶〉はインフォーマントのその後の日本語・日本文化との接触との関係性から、ライフストーリーの中で把握する必要があること。三つめは、インフォーマントの語る内容が、インフォーマントとインタビュアーとの対話を通して構築される対話的構築主義アプローチである点をより意識する必要があること。四つめは、インフォーマントの記憶には歌が重要な位置を占めており、これは帝国主義と身体に刻み込まれた韻律の関係性を示唆していること。五つめは、インフォーマントが満州国で受けた教育がその後のキャリア形成の資源となっていることである。これらの点について、今後の研究課題として考察をすすめていきたい。

注

- (1) 「満州国」には括弧を付して表記すべきであると考えるが、煩雑さを避けるため括弧は省略した。
- (2) 『学術研究・人文科学・社会科学編』2016年3月
- (3) 北海道大学大学院教育学研究科博士学位申請論文、2015年12月
- (4) 山本有造編著『満州 記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年
- (5) 御茶の水書房、2007年
- (6) せりか書房、2002年
- (7) 前掲『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』
- (8) 注(2)

【付記】本研究はJSPS17K02449 科研費の助成を受けたものである。

(おくだ・こうじ 本学教授)